

蒲西お囃子會

近年、いろいろなところで「地域の底力」の輪が大きな広がりを見せている。

子どもが大好き、地元が大好き、そして祭りが大好きな方々が、底力を発揮して注目されているのが蒲田西口町会の「蒲西お囃子會」である。

祭りといえば切っても切れないのがお囃子。祭りの一番の引き立て役だ。ところが、六、七年前までの祭りでは、お囃子がテープで流されていた。

そこで、日本文化の伝統を子どもたちに伝えたいと立ち上がった。知り合いを通じてお囃子を教えてくれる先生を頼み、子どもたちを集めてお囃子の同好会を作った。

当初は、笛の音も出ず、太鼓の音もバラバラ。みんなに聞いてもらえるようになるかと心配したが、練習を重ね、四年ほど前からは蒲田西口町会の顔として活躍の場も増えてきた。今では祭りだけでなく、さまざまな大会でも活躍の場も増え、大田区子どもガーデンパーティーにも花を添えている。初めは五、六名だったメンバー

も、現在は保育園児から高校生までの子どもたちと世話役の大人の総勢二十八名で活動している。祭りやガーデンパーティーで、緊張しながらも張り切ってお囃子を演奏する子どもたちの姿を見て、「私もやりたい」と入会してくる子どももいる。

月に一回、日曜日の夜に行われる練習を、子どもたちは心待ちにして集まってくる。太鼓の音は響くため、練習ではゴムラバーを貼った板を太鼓に見立ててたたくなど工夫を凝らしている。



楽譜がないため、口頭で教わるリズムを覚えなければならぬが、子どもたちは大人とは比べ物にならないほど覚えが早い。難しいリズムもあつという間に覚えてしまないほどだ。以前から習っている子が入ったばかりの小さな子の手をとってたたき方を教える姿は、とてもほほえましい。異年齢の子どもたちと地域の大人が、みんな一つのことに取り組める場があるというのは素晴らしいことだ。

子どもたちを通じて地域の絆を深めていくのも大きな目的の一つとなっている。

今年から練習の場を女塚神社の社務所に移して、ますます練習に力が入っている。

今年には神社の本祭りの年でもあり、祭りでは、子どもたちの練習の成果を見ることが出来るだろう。これからのますますの発展が楽しみである。

(取材 伊藤委員)

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一二十七
(三七三三) 四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,915人
	女	27,307人
	計	57,222人
世帯	30,835世帯	

平成22年2月1日現在

編集後記

平成十三年九月一日発行の創刊号で当時の蒲田西地区自治会連合会会長としてご挨拶いただいた鈴木廉士氏が昨年十月に、平成十九年十二月一日発行第二十六号のわがまちの顔でご紹介した南蒲幼稚園園長・丹尾シズエさんが昨年十一月にお亡くなりになりました。また、本誌創刊号から副編集長としてご活躍いただいた柏村茂さんが本年一月にお亡くなりになりました。ここに謹んでご報告し、ご冥福をお祈りいたします。

平成22年3月1日発行

わがまちの顔

第35号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

帝京高校野球部 佐藤秀栄さん



平成二十一年夏の高校野球甲子園大会で、東東京代表として出場した帝京高校の佐藤君を紹介いたします。佐藤君は、東矢口二丁目在住、矢口小学校から安方中学校を経て、帝京高校に入学しました。子供の頃、野球好きのお父さんとキャッチボールをしたのがきっかけで野球に興味を持つようになり、「安方フェニックス」に入り、キャッチャーで「オール城南」の選手に選ばれ、キャプテンとして西東京オープン選抜少年野球大会で優勝を果たしました。

安方中学校に入学後は、クラブチームの「世田谷西



シニアリーグ」に所属し、念願だったピッチャーになり、キャプテンとしてもチームをまとめ活躍。帝京高校では、二年生の時にレギュラー入りし、ライトを守っていました。この時に、春の東都大会で優勝して、関東大会に出場しています。三年生の時はキャプテンで四番バッターという重要なポジションの中、シードで四回戦から試合をし、東都大会で優勝して見事甲子園出場という快挙を成し遂げました。第一試合の福井の教賀気比高校に勝ち、第二試合の九州国際大学附属高校戦ではサヨナラ勝ちで勝利し、その勢いで第三試合の岐阜県立岐阜商業に挑みましたが、六対三で惜しくも負けてしまいました。甲子園という特別な舞台で、緊張の中、準々決勝まで勝ち進んだ選手の方々の功績は大きいと思います。

帝京高校野球部は、創部六十年、約五十名の部員が日々練習

四月から東洋大学に進学が決まった佐藤君ですが、一月末に大学の寮に入り、そのまま大学の野球部の練習に参加し、卒業式も寮から参加、終了後すぐ寮に戻る事になるそうです。初めての寮生活に多少の不安はあるようですが、「今まで応援してくれ、支えてくれた両親に恩返しをするために、しっかりと強い心を持った人間になりたい。」と語ってくれた佐藤君の姿が印象的でした。

小学生の時から野球少年で、夢は「プロ野球選手になる事」という佐藤君。目標とする野球選手は、張本さん、王さん、落合さんとの事です。

夢を実現させるために、ご両親、先生方、多勢の人たちが応援しています。大学でも頑張ってください。

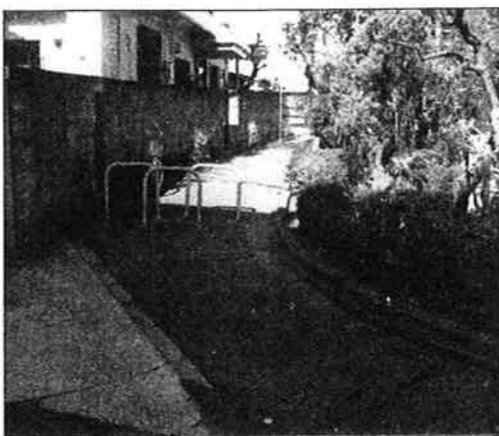
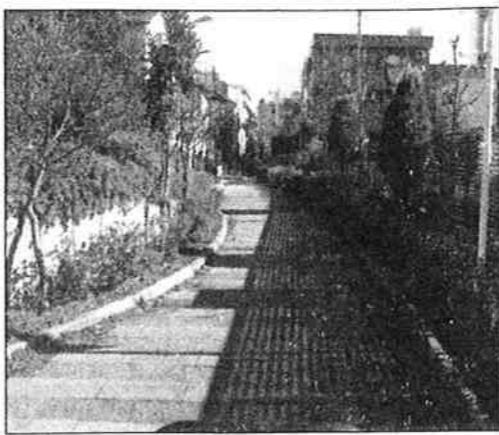
(取材 高橋委員)

六郷用水 完成四百年に向けて

左の写真をよく見てください。いずれも蒲田西地区で撮ったものですが、どこかわかりますか？ よく見ると道路の両側に植栽があったり、曲線を描いたりしています。三枚目の写真をよく見ると、道路が六差路になっていますね。

それではこの三枚の写真に共通していることは何でしょうか？ そう、いずれの写真もかつて六郷用水が流れていた跡を撮ったものなのです。

私たちの町を歩いてみると、写真のような何となくいわずと



りげな緑道（グリーンベルト）に出合ったり、区が設置した『六郷用水物語』と銘打った案内標識や地面の埋め込みタイルを目にすることがあります。それは、かつてはこの辺りがのかな田園地帯であり、六郷用水が田畑を灌漑していた、ということを物語っています。現在の都市化された町並みから想像するのは難しいことですが、昭和初期まで大田区は近郊農村地帯でした。

今回採りあげた六郷用水については、既に本紙第四号（平成

十四年）で特集していますが、それから八年が経過していますので、もう一度振り返ってみたいと思います。

六郷用水の開削工事

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉の命により関東に転封し、新たに領地を得た徳川家康は、江戸の城下町づくりと並行して、領地経営の財政基盤の充実を図るため農地開発に着手しました。江戸近郊、多摩川下流域両岸の低地平野部に用水を引いて水田化するというのは、その開発事業の一環でした。家康から用水奉行を拝命した小泉次太夫は、幕府が開かれる六年前の慶長二年（一五九七）から測量に着手し、同四年（一五九九）から本格的な開削工事に切り掛かりま

す。十年後の同十四年（一六〇九）本流部分が完成し、さらには二年後の同十六年（一六一一）には末端の支流まで完成しました。これにより多摩川下流域の農村に水路網が張り巡らされ、この地域の農業生産規模は飛躍的に拡大しました。

多摩郡和泉村（現在の狛江市和泉）で多摩川から取水された六郷用水は、途中で野川、仙川、矢沢川などの自然河川の水も集めながら、喜多見、岡本、等々力、下沼部など、世田谷領の流域の村々（井筋十四か村）を国分寺崖線に沿って通過し、嶺村から六郷領に入ってきました。六郷領は現在の行政区分ではない範囲をほとんど含み、大田区低地平野部のほとんどを含む広い範囲を含んでいました。難工事といわれた嶺の切通しを過ぎ、やがて矢口村の境で二流に別れ

（南北引き分け）、一流は北堀として池上、新井宿、大森方面へ、もう一流は南堀として、矢口、六郷、羽田方面へと流れていきました。私たちの蒲田西地区では安方、原、小林、道塚、御園の各村は南堀から、また蓮沼と女塚村は、北堀と南堀の両方から取水しました。六郷用水

の流路を二十三キロや三十キロと表した記述を見かけますが、これは本流部分だけで、毛細血管のように張り巡らされた末端の支流まで含めると、総延長は計り知れない数字になります。

六郷領を灌漑する用水

六郷用水は、その名前からもわかるように、もともとは六郷領三十五か村に水を引くために掘られたものでした。そのため、流域の世田谷領十四か村には取水権はありませんでした。ただし、六郷用水の掘敷地になったため少なからぬ田畑が消滅したことや、世田谷領の田畑を潤していた野川、仙川などの河川を合流、吸収したこと代償としての用水利用が黙認されていました。

開削から百年余りたつと、素掘りの用水路の護岸や用水敷の破損は激しく、また下流域での水田開発が進み、慢性的な水不足に悩まされだしました。この用水の老朽化に対して川崎宿の名主であった田中丘隅は享保十年（一七二五）、用水堀拡張の改修工事に着手し、工事は翌年完成しました。この結果、それまで世田谷領に暗黙のうちに取水が許されていた慣行が改めら

れ、六郷領に差し支えない範囲での取水が幕府公認となりました。

ところで、小泉次太夫は多摩川の右岸川崎側にも、用水を開削しました。規模は六郷用水の二倍以上あるのですが、まったく同時期に作られたので双子の用水だといえます。こちらの用水は稲毛、川崎の二つの領を灌漑したので二ヶ領用水と呼ばれています。

六郷用水の変遷

江戸から明治と時代は変わっても、しばらくは大田区地域の近郊農村としての基本的性格は変わらず、明治末期には農業用水としての最盛期を迎えます。しかし、大正期に入ると大田区の市街地化が始まりました。大正五年（一九一六）、区内でも早く入新井地区で耕地整理組合が設立され、以後、区内各地で耕地整理が実施され、農地は宅地や工業用地へと変わっていききました。池上線や目蒲線などの鉄道の敷設、関東大震災による都心部からの人口の流入が農地の市街地化に拍車をかけました。そして六郷用水は農業用水としての使命を終え、昭和二十一年（一九四六）には組合（六

郷用水普通水利組合）は解散しました。

その後、六郷用水は利用目的を変え、生活排水路として利用されるようになります。しかし、上流ほど幅が広く末端になるほど細流になる構造の農業用水路は、生活排水路としては相応しくなく、「どぶ」と化し滞留して悪臭の発生源になったり、有害生物生息の温床になってしまいました。さらに自動車の普及による道路需要や都市公園の不足から用水路は暗渠化されたり、埋め立てられて道路や緑道に変身していききました。

やがて下水道の普及とともに、厄介者扱いであった六郷用水は、今度は環境用水として再び見直されるようになります。そして現在の田園調布本町から田園調布南にかけて旧水路部分の一部復元工事が始まります。ここはいま親水散策路として区民に安らぎと憩いの場を提供しています。

完成四百年に向けて

大田区立郷土博物館の利用者団体に、『水路の会』という有志のグループがあつて、六郷用水を中心とした区内外の歴史的水環境を学習する活動を続けて

います。また昨年から大田区教育委員会社会教育課では区民大講講座の一環として『水先案内人講座』六郷用水に学ぶ』を開講しています。この講座はこの三月で終了しますが、新しいグループを立ち上げ、学習活動を続けようとしています。

来年（二〇一一）は、六郷用水と二ヶ領用水が完成して四百年の節目の年を迎えます。対岸の川崎側では行政、市民が手を携えて用水の現代的意味を探る運動を準備しているようです。六郷用水の恩恵を受けた土地に暮らす私たちも、地域の歴史遺産としての六郷用水にもっと関心を持っていいのではないかと思います。四百年を機に六郷用水ガイドを養成する、散策マップを作る、地域の学校に向きお話をするなどいろいろ考えられます。また、六郷用水を憶えている方のお話をまとめて冊子にし、後世に伝えるというのにも意義があると思います。関心のある方は「水路の会」（電話三七三八―八九一六 多田）までご連絡ください。

（取材 多田委員）

写真 上・西蒲田四丁目

中・西蒲田五丁目

下・新蒲田一・二・三丁目境